

令和4年度厚生労働科学研究費補助金(認知症政策研究事業)

併存疾患に注目した認知症重症化予防のための研究

分担研究報告書

### 高血圧レジストリにおける認知機能の縦断的調査

研究分担者 山本浩一 大阪大学大学院医学系研究科 老年・総合内科学 准教授

研究要旨 我々は多施設医療機関の 65 歳以上外来通院高血圧患者のデータを用いて、認知機能低下の実態について研究を行っている。今回、縦断データを用いて解析した結果、認知機能低下の改善、進展と握力に関連があることが示された。

#### A. 研究目的

本研究では、65 歳以上の高血圧患者で、経時的な認知機能変化に関連する因子について検討した。

#### B. 研究方法

全国 6 つの専門機関の高血圧外来に通院中の 65 歳以上の高血圧患者で、認知症の診断がついておらず、Mini-mental state examination (MMSE)が施行可能であった 248 名(年齢 76.0±6.0 歳、男性 123 名)を対象とした。MMSE 23 点以下の対象者を除外し、MMSE 27 点以下を認知機能低下と定義した。ベースラインと 1 年後に MMSE を含めた総合機能評価と筋力検査を行い、1 年後に新たに認知機能低下を認めた群をコンバート群、また認知機能低下から 1 年後に認知機能の改善を認めた群をリバート群と定義した。(倫理面への配慮)研究計画は各施設の倫理委員会で承認され、参加者から書面上の研究同意を得た。

#### C. 研究結果

ベースライン調査では、74 名が認知機能低下群に分類された。1 年後のフォローアップでは、認知機能非低下群 174 名のうち 36 名が

コンバート群に、認知機能低下群 74 名のうち 38 名がリバート群にそれぞれ分類された。

コンバート群は、認知機能維持群より高齢であり、家庭血圧が高く、1 年後に握力低下に分類される対象が多かった。多変量解析では、コンバート群に年齢(オッズ比 1.1, 95%CI 1.0-1.2)と 1 年後の握力低下(オッズ比 2.8, 95%CI 1.07-7.32)が関連していた。リバート群は、認知機能低下持続群よりも年齢が低く、握力が弱かった。多変量解析では、リバート群には 1 年後の握力低下(オッズ比 0.1, 95%CI 0.01-0.36)が関連していた。

#### D. 考察

高齢高血圧において、約 30%に潜在的な認知機能低下を認めた。また、1 年間で認知機能が変化するケースを高率に認めた。コンバート、リバートともに 1 年後の握力との関連が認められ、握力の変化と認知機能の変化に関連があることが示唆された。認知機能と筋力が同時に低下する認知フレイルの概念を支持する結果と考えられる。

#### E. 結論

高齢者高血圧患者の経時的な認知機能変化は筋力の変化と関連することが示唆された。

G. 研究発表

1. 論文発表 なし

2. 学会発表

第59回日本循環器予防学会学術集会

高齢者高血圧における潜在的な認知機能変化に関連する因子の検討

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし

2. 実用新案登録 なし

3.その他 なし